

中島 由美 三島北高WWL推進室長



事業を振り返る中島由美
WWL推進室長=9月下旬、三島市の三島北高

教育改革核心を問う

WWL事業が始動して1年で新型コロナウイルスが世界的に流行し、対面での国際間交流は制約を受けた。その中で、事業拠点校として高校生の国際的な視野を広げる学びの仕掛けを検討してきた中島由美推進室長に事業の活動について聞いた。

―国際会議の総括を。
「連携校と歩調を合わせて準備し、緊急事態

深める研究 知的意欲へ

ポイント

課題の共有経験 大きい
アプローチ力自ら養う
生徒の英語交流 貪欲に

宣言下ではあったが何とか実現させた。生徒は各校で議論の素材を養ってきたため有意義な対話ができた。当日は英語の壁を感じた生徒もいただろうが、絞り出して伝わった充足感があった。

たのでは。他国の生徒と情報交換して、互いに同じ課題を抱えていることに気付けた共有の経験も大きい。国際課題が自分ごとになったことで次の知的意欲につながっていくと期待する。―3年間の活動でどのような点を意識してきたか。
「各校とテーマ共有したSDGsは、簡単には答えが見つけにくい。活動当初から生徒が自ら具体的な課題を見つけ、結論までのアプロー

チ力を養ってほしいと構想した。グループワークや対話を重視して、生徒がもう十分突き詰めたと感じた段階であっても他者の発言を受けてさらに一歩踏み込むようなサイクルを教員間で心掛けた」

―生徒たちの変化は。

「少人数のチーム研究に取り組んだことで、自ら試作品を作るなど行動し、人を動かすようになった。当初の目標を達成した時点で終わりではなく、発信し、反応を得てより良いものにしていくという終わらない循環が生まれた。普通科の生徒が取り組むことが面白いのでは。英語に関してはコロナ禍でコミュニケーションの機会が減ったが、生徒は貪欲になった」

―コロナ禍での制約をどう受け止めるか。

「海外への一連の生徒派遣が中止され、国際会議も他国の生徒を招くことができなくなった。三島では議論のほかにスタディーツアーなども計画していただけに、本当に残念だ。しかし、逆風にあっても各国間で共有しやすい課題を設定したり、教員が生徒に寄り添いながら課題へのアプローチ力を支援したりする要点は培われた。生徒たちが想像した以上に共感し合う姿がその先の展開を示唆し、印象的だった」